

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2010年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	研究科	専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程二年	Bjoerk Tove	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	立教大学文学部・教授	加藤定彦	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	二世市川団十郎の日記抄をめぐる江戸中期の嗜好品文化と演出		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2010	年度	
研究経費	200	千円	

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

二世市川団十郎は江戸中期歌舞伎の代表役者で、彼の日記によれば煙草を好んだ。役者評判記などから舞台上でもしばしば喫煙していたことがわかる。本研究では彼やその他の役者によって舞台における喫煙場面がどのように創出され、進展したかについて明らかにした。社会における煙草の容認度は各時代によって異なり、その違いが舞台芸術にさまざまな影響を与えた。そこで煙草に関わる演技の意味を理解するために、煙草の伝来、歌舞伎と煙草の関係について概観した。次にお国歌舞伎と男伊達の演技の出現、およびそれらが禁じられた後の喫煙の場面について整理を行った。加えて、煙草文化の一般化と元禄歌舞伎の役柄の特殊化についても吟味した。そのうえで二世団十郎の日記における煙草の記録を分析することによって彼の煙草観を明らかにし、それが歌舞伎の舞台にどのように現れるかを検討した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[二世市川団十郎] [江戸中・初期歌舞伎] [たばこ]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

I. 江戸初期・中期の煙草文化と演出

1. 男伊達の登場と喫煙の演出

煙草が日本に伝わった天正・慶長期に、歌舞伎は舞台芸術となった。『慶長年録』(慶長十四年)によると、男伊達たちは伊達を表象する道具として煙草に強く惹かれ、大きな煙管を腰に差したり、下人に持たせ、人々に喧嘩をふっかけたという。お国が演じた「茶屋遊び」の場面にはそうした男伊達が登場する。しかし、三浦浄心撰『慶長見聞集』(慶長十九年)を見ると、その舞台姿は「こがねつくりの刀、わきざしをさし、火打袋、ひょうたんなどこしにさげ」と、火打袋ぐらいしか喫煙道具は見当たらない。それは、例えば梅津政景の日記にあるように、喫煙が厳しく取り締まられていたことに起因する。元和期以降、幕府の取り締まりが軟化すると、喫煙場面が登場する。松平直矩の日記によれば、寛文九年正月十一日、鶴屋播磨を呼んで「からくり人形芝居」を見物、その「茶屋遊び」の場面に、田楽を食べたり、煙草を呑む人形の番組があった。歌舞伎の例では、翌十年正月の市村座の番付に「たばこや衆道」という演目を指摘することができた。

2. 煙草文化の定着と文学的表現

松平直矩の日記によると、万治三年四月二日には、出羽殿へ人形浄瑠璃や狂言の見物に出掛けた記事があり、その末尾に「面白き事かぎりなし。一、盃の事、一、茶の事、一、莨菪の事」と付記されている。煙草は酒や茶とともに、慰藉・娯楽の時には必需の嗜好品となった。

やがて煙草は文学にも現れるようになる。まず「若煙草」という語が、松江重頼編の『毛吹草』(正保二年)で八月の季語とされ、同編の俳諧集『懐子』(万治三年跋)にはじめて、「若多葉粉 呑煙むせぶもうれし若たばこ 重庸」(下略三句)の作品が登場する。

『狂歌煙草百首』によると、元禄期、煙草はすでに大規模な産業・商品となっていた。『けいせい浅間嶽』(元禄十一年正月初演)によると、なかでも「服部煙草」が高級との定評を得ていたようである。

江戸中期になると、『風俗文選拾遺』(延享元年刊)の俳文「多葉粉の頌」には、より安価な接客用の「番茶」ならぬ「番煙草」が取り上げられ、減らぬが取り柄だなどとの皮肉な評が見えるし、『風狂文艸』(延享二年刊)の俳文「煙草の銘」には、煙草は「閑居のつれづれ」を慰めるのに最適で、「客あれば茶と召(よ)ばずして、先づ煙草ともてなす」と述べた。また同じく「芝居の賦」には「煙斜めに霞横たはるは、煙草のくゆるなり」と、当時、観客の多くが喫煙し、密閉された芝居小屋の濛々と紫煙たなびく光景を活写している。

こうした状況の中、煙草に関わる演出は多様化し、元禄期では大別して、濡れ場、権力また心理的優位を誇示する場面、そして煙草売りの場面に分けることができる。最後の煙草売りの場面は、早くから登場した「物売り」の〈やつし事〉にも関わり、既述の松平直矩日記に登場する「たばこや衆道」の趣向に繋がるものでもあった。

また、享保三年頃には「たばこうり」の台詞本——煙草の銘柄による物尽くし——が市中で売られ、煙草に関する舞台演出は現代のコマーシャルにも通じる経済的利益を芝居町の煙草屋にもたらすことになった。

こうした煙草文化の浸透とともに、煙草にまつわる演出が増えていき、役者絵にも頻繁に喫煙姿が描かれることになる。二世嵐三右衛門、桐野屋権十郎、澤村音右衛門らの姿絵がそれだが、なかでも際立つのが二世市川団十郎だった。

研究成果の概要 つづき

3. 二世団十郎日記に見える煙草の記事

二世団十郎日記の享保十九年六月十三日の記事に、「ミチミチタバコノミケレバ」と前書して「スリ火打下手ナ手付ヲ咲ワレテ」と連句の第三を詠んでいて、日頃から煙草を吸っていたことがわかる。

さらに次の記事に注目したい。一つは病氣見舞にもらった煙草を順快の印と喜んで「題若煙草 若やぐや長命草の呑みごゝろ」と詠み、観音様に奉納していることである。煙草は「長命草」とも呼ばれていて、日記全体的には彼の強い養生意識が現れており、団十郎は本気で煙草が寿命の薬であると考えていたらしい。

次は、寛保二年の三月二十九日と七月七日（別本では十五日）の記事で、大坂新町の遊女柏木・花戸太夫にもらった煙草入れを自慢している。二世団十郎にとって、遊女から煙草入れをもらうことは伊達男としての名誉であり、「吸い付け煙草」と同様、煙草道具は遊郭（＝男女関係）における儀式・交歓の上で不可欠の品だったのである。

4. 二世団十郎による「吸付け煙草」の場面

二世団十郎が創出した「毛抜」（『鳴神不動北山桜』寛保2年正月、佐渡嶋座）では科学を応用した場面に煙管が登場する。また、「矢の根五郎」（『樸根元曾我』享保五年正月、森田座）では、煙草の煙が春の霞に見立てられている。さらに、「暫」（『天地太平記』延享三年十一月、中村座）、等の有名な場面にも煙草が現れており、二世団十郎にとって喫煙は〈助六〉以外の演技にも重要な舞台表現であったことがわかる。

ところで花川戸助六は、正徳三年三月の『花屋形愛護桜』に初めて登場する。寛延二年三月の『男文字曾我物語』（中村座）において、二世団十郎は三度目の〈助六〉を演じ、このときの「吸い付け煙草」の場面を確認できる資料が残されている。この頃、助六狂言の舞台である吉原には桜の木が植えられ、遊郭は賑わった。このため、舞台に桜を飾り、『男文字曾我物語』の浄瑠璃「助六廓の家桜」では、散る桜と煙草の煙による吉原の雰囲気がかかっている。

恋に身を移り香ばかり抱き締めて。また寝の夢をこそぐられ浮世に返る。清搔の。ねむい目元の絲桜。睡覺めよと。吹きかける煙草も薫る花の雲。鐘は上野か浅草か。名もなつかしき花川戸。

『寛延期江戸芝居狂言本』によると、髭の意休と助六の対面の場面で、助六は遊女たちからもらった多数の煙管を持ち、立ったまま、右足の指に一本挟んだ格好で、

おやぢどの、おれがくるわかさ（郭傘）をさすハなんのためだとおもはつしやる。きせるが雨のやうにふるから。それでさしているわいの。これこれ、きせるをかしてやろうぞ。

と、意休を挑発し、刀を抜かせようとする知略をみせる。この場面に見られる自慢の姿は、先に述べた、大坂新町で二世団十郎が太夫たちに囲まれたときの日記を思い出させる。『男文字曾我物語』の上演は大坂新町一件の約七年後なので、自分の経験を舞台に移したのではあるまいか。二世団十郎にとって、煙草が「長命草」という薬であれば、遊女たちから「吸い付け煙草」をもらうことは、生命力を授かることにもなる。煙管で喧嘩をふっかける演出は、近世初頭の男伊達を思い出させる。二世団十郎の、足で煙管を渡すという極端な挑発行為には、意休の生命力を奪おうという意志がこめられているとも言える。

こうした演出によって二世団十郎は助六の男伊達ぶりを際立たせることに成功し、観客は喝采したのである。しかし、江戸中期の〈助六〉にはまだしっかりとした形がなかった。享保十八年に行われた八世市村羽左衛門の助六狂言（『英分身曾我』、市村座）は傾城の身請けを中心に展開していた。また、元文四年、三代目団十郎が演じた助六（『初髻通曾我』「助六定紋英」、市村座）は得意の尺八を吹き、遊女と戯れた。役者本人の個性に即した、自在な演出と評することが出来る。

※ この（様式 2）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式）を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

研究論文

「二世団十郎と歌舞伎における喫煙の演出」『立教大学日本文学』第105号、渡辺憲司教授定年退職記念号、2010年12月15日(70-83頁)

「二世団十郎の養生意識と演出—『日記抄』ノート(二)—」『立教大学日本学研究所年報』第8号(2011年3月)

研究口頭発表

「〈助六〉をめぐる江戸中期の煙草文化と歌舞伎における「型」の発展」、2010年11月27-28日、「書物としての可能性—日本文学がカタチになるまで—」第34回国際日本文学研究集会、(『書物としての可能性—日本文学がカタチになるまで—第34回国際日本文学研究集会会議録』(2011年3月31日、177-190頁))